【第12号】

自分らしく生きる

多くの高齢者は、人の世話にならず自立して生活することを望んでいますが自分の思うようにならないのが常です。在宅・施設という枠を超えて、人はどのように人生の最終章を生きているのかをシリーズでご紹介いたします。

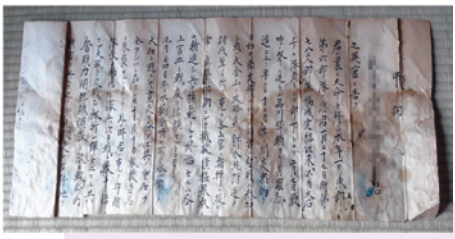
仏さまに守られて 一〇一歳を一人で暮らす

北区　長谷川とみさん（一〇一歳）要支援1　高血圧

時代の波に翻弄されて

長谷川さんは一〇一才にして一人暮らし。週に一度デイサービスに通い、近くに住む娘さんに支援を受けながらもほとんど自立した生活を送っておられる。身のこなしの軽さにただただびっくり。笑顔の素敵な長谷川さんだが戦前戦後は沢山のご苦労をされた。

生まれは埼玉の行田。ここで最初のご主人と結婚するが、三年程で出征してしまった。一人で留守を守るある夜、夢見枕にご主人が立った。頭が痛いよと言ったそうだ。その数日後、軍隊から銃創貫通で亡くなったご主人の戦死を告げる知らせが届いた。



弔詞（戦死の知らせ）
「人にはあまり見せたことないのよ」
貴重なものを見せていただいた

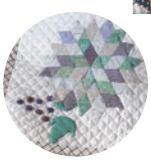
家族の支援で幸せに暮らす

その後再婚され、赤羽で暮らす。ぜんそくや病気がちのご主人の家計を助けるため和裁をして娘さんの学費を稼いだ。ご主人はすでに他界されたが娘さんを育て上げお孫さんも近くに住み三世代でお墓参りは欠かさないとのこと。娘さんやお孫さんを常に褒め良い関係が見て取れる。

「三才の時に母に死なれ、夫は戦死し神も仏もいないと思ってました。でも今は仏様に守られ、娘も孫も良くしてくれている。昔の苦労があったから今が幸せと思えるし、その思いがあるから長生きも出来るのだと思う。それと好きなことをしているからね！」

和裁で培った器用さもあり手芸、パッチワークの腕は相当なもの。部屋にはいたるところに作品が飾られ、色使いも綺麗。そして体力作りに散歩も欠かさない。しかしそうは言っても高年齢のお一人暮らし。体調の変化などで何かあった時の不安や心配はおありのご様子。

「長生きしすぎたのよ！」と笑う。でも戦争の時代を経た今、心穏やかに感謝して日々を過ごす。その姿は私たち戦後世代の励み、お手本となる。

（終戦から75年が過ぎた2020年8月）

手芸作品に囲まれて。　地域の集いに参加し編み物や体操も行っている